

氏 名 松岡 とも子

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 2287 号

学位授与の日付 2022 年 3 月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 韓国近現代画家金煥基の南北分断体験と制作——1950 年
代におけるモチーフの変遷と時代性に着目して

論文審査委員 主 査 齋藤 晃
地域文化学専攻 教授
岡田 恵美
比較文化学専攻 准教授
山中 由里子
地域文化学専攻 教授
岸上 伸啓
人間文化研究機構 理事
板垣 竜太
同志社大学 社会学部 教授

(様式3)

博士論文の要旨

氏名 松岡とも子

論文題目 韓国近現代画家金煥基の南北分断体験と制作
——1950年代におけるモチーフの変遷と時代性に着目して

本論は韓国近現代美術家金煥基（キム・ファンギ 1913～1974）の1950年代の制作活動について、個人の経験を示す包括的な一次資料と作品分析から、南北分断期の社会的背景や時代性における彼の活動の意義を明らかにするものである。

金煥基は日本統治期の1930年代の東京に美術留学し、植民地解放後の韓国画壇を牽引した韓国近現代の代表的画家である。1950年代後半にパリに滞在し、1960年代から亡くなるまではニューヨークに暮らした。1950年代に多く描かれた朝鮮時代の白磁満月壺の絵画は彼の代名詞となっており、1960年代の渡米後に始まる純粹抽象絵画と双璧を成すものである。

これまでの金煥基の作家論・作品論に通底するのは、彼の1950年代の制作を朝鮮陶磁の絵画に代表させ、そのモチーフ選択を日本統治期の修養時代に端を発するものとして論じている点である。しかし金煥基が陶磁器の絵画を描き始めたのは植民地解放後のことであり、それは1945年の植民地解放と連合軍の分断統治、1948年の大韓民国の建国、1950年から1953年の朝鮮戦争期へと続く、朝鮮半島が南北に分断されて行く時期にあたる。加えてこの時代の作品分析は主に変遷研究の形で行われ、個別の作品分析も十分でなかった。そこで金煥基の1950年代の作品制作について、植民地解放後の時代背景と画家の制作状況に即した新たな作品分析が必要ではないのかというのが本論の問題意識である。

本論では、従来の研究で軽視されてきた作品に関する直接的な記述のない新聞・雑誌への本人の随筆や挿画、関係者の書簡、回想録やインタビューなどの関連資料を網羅し、詳細な生涯年譜を作成することを基礎作業とした。これにより金煥基がいつどこで誰とともに何をしたかを月単位で把握し、日々の生活と時代背景、作品制作を並行的に見る作品分析を行った。さらに美術史研究においては分析対象となりにくい現存しない作品も、画業において重要なものは分析が可能となった。

第1章、2章では朝鮮戦争勃発以前の制作活動の特徴を明らかにし、1950年代の活動との差異を明確にした。第1章は日本統治期の全羅南道木浦近郊の箕佐島での生い立ちから東京への美術留学を経て帰国するまでの画家の修養期を扱った。本論においては金煥基の学生生活が常に植民地留学生として格差の中にあったことを指摘し、吉鎮燮（キル・ジンソプ 1907～1975）ら日韓の画友4人で結成した「白蠻会」の活動等を中心に考察した。「白い蛮人」を示すグループ名は、白衣民族と言われた朝鮮人を野蛮人とした皮肉的な自称である。第1回展に出品したキムチ甕を描いた作品《甕》（1936年）は、これまで留学期の故郷憧憬として分析され、1950年代の朝鮮白磁の作品の出発点として考察されてきた。本章では同時出品の《ユダル山》（1936年）等の分析から、出品作は日本人にも親しみやす

い朝鮮の故郷風景の裏に日本統治下における朝鮮人の葛藤が表現されていることを明らかにし、ここに描かれた生活雑器としての《甕》は 1950 年代以降の朝鮮陶磁を描いた作品とは全く異質なものであることを結論づけた。

第 2 章は植民地解放から朝鮮戦争勃発直前の時期を扱った。この時期は、1945 年 8 月の植民地解放、9 月からのアメリカ軍政、1948 年 8 月の大韓民国建国という、朝鮮半島の南北分断が進む時期にあたる。金煥基は朝鮮陶磁の観賞収集を通して文学者や美術家、研究者らとの親交を深め、出版物での作品制作を契機に朝鮮陶磁の絵画を描き始めた。同時に、ソウル大学芸術学部の教授職を辞め左派右派の合同団体であった 50 年美術協会結成の発起人になるなど、南北分断への批判的態度を明確に示していたことを明らかにした。

第 3 章は 1950 年の朝鮮戦争勃発から 1953 年の休戦協定までの時期を扱った。釜山に避難した画家たちは過去の作品や制作道具、制作場所と展示施設など画業の継続に必要な環境の全てを失った。金煥基は弘益大学美術学部の教授職等の収入があったが、友人画家や美学生の制作活動が続けられるよう手を尽くし、新聞紙上において韓国の画家たちの窮状を訴えるなど、瀕死状態にある韓国画壇の維持に尽力していた。

朝鮮戦争期に新たに描かれたのは、《避難列車》(1951 年)《バラック》(1951 年)など、避難生活を直接的に描いたモチーフである。アメリカの戦時広報誌『コリア』や韓国の『東亜日報』の挿画との相関性を示し、前者には避難民の過酷な現実の報告が、後者にはバラック生活におけるささやかな理想像が込められていることを考察した。また当時の韓国は、国民国家体制の強化のため南に統一王朝を建てた新羅時代の歴史や文化が称揚され文学作品にもよく登場していた。この時期に描かれた《石窟庵の印象》(1952 年)の仏像のモチーフと、パリの画廊に送るとした《太陽と壺》から、彼が新羅時代の文化を現すモチーフを今後の新機軸としていたことを指摘した。

第 4 章は 1953 年の休戦協定以降から、1956 年から 1959 年のパリ滞在と帰国までを扱った。本章が明らかにしたのは、1930 年代に金煥基が抱いていたパリ美術への期待と現状とのギャップである。渡仏前に個展のため準備した作品は朝鮮時代の白磁壺等に加え、休戦後ソウルの清溪川覆蓋工事で消えようとしていた風習《踏橋》を描いたものであり、画家や評論家に韓国の興趣として絶賛され彼も韓国の画家としての自負心をもって出発した。

しかし渡仏し金煥基が感じたのはパリ現代美術のトレンドの変化と韓国の文化や美術への無関心、そして日本統治期に受けた西洋美術教育の無力である。美術学校に通い直し現地の展覧会で大賞を取った南寛(ナム・グァン 1991~1990)に比べ、金煥基はパリ現代美術のコンテクストに添う意義を感じず、作品の様式を大きく変えぬまま生活に困窮し帰国した。

しかし、このことは金煥基という画家とその作品が韓国においていかに必要とされ、彼もまたそれに応えて来たのかを逆説的に示すものである。渡米後の金煥基は完全抽象絵画へと様式を変えるが、渡米後も絵が売れず苦しい生活を送った。だがアメリカから参加した韓国の第 1 回韓国美術大賞で大賞を受賞して絶賛され、韓国においては高い評価を受け続けた。金煥基が 1950 年代に描いた朝鮮陶磁や韓服の女性像、韓屋、避難生活といったモチーフは、作品のみ分析するならば日本統治下や韓国政府下の官展で利用されてきた主題と大差がないものである。しかし本論において彼の南北分断体験を明らかにし新たな作品分析を行うことで見えたのは、朝鮮美術への愛を無骨に語り、友人後輩を助けては経済

困窮を繰り返す金煥基の鷹揚で愚直な人柄と、一貫して権威主義に反発してきた画家としての姿勢である。これにより従来の研究から見えてこなかった新たなモチーフの変遷とその社会背景との関係を明らかにし、朝鮮美術が阻害されてきた南北分断期における金煥基の存在意義と、ともに韓国画壇を背負って来た同世代の画家たちの歩みも浮き彫りにした。

博士論文審査結果

Name in Full
氏名 松岡とも子

Title
論文題目 韓国近現代画家金煥基の南北分断体験と制作—1950年代におけるモチーフの変遷と時代性に着目して

本論文は、韓国近現代美術の代表的な画家のひとりとされる ^{キム・ファンギ}金煥基（1913～1974）に焦点をあて、1950年代の彼の創作活動と作品のモチーフを本人の生活状況や人間関係、社会的背景や時代的動向を踏まえて詳細に分析し、韓国近現代絵画史における彼の位置づけを精緻化することを目的とする。

金煥基に関する先行研究は、画題・構図・技法などの長期的変遷を作品分析により明らかにするものが主流であった。それに対して本論文では、作品だけでなく、新聞や雑誌の記事、インタビュー記録、書簡などの一次資料を未発掘だったものも含めて網羅的に収集し、1) 日本統治期の東京留学、2) 植民地解放後のソウル滞在、3) 南北分断・朝鮮戦争の前後、4) パリ滞在という時期区分に沿って整理し、綿密に分析している。

本論文は序論と結論を含めて全6章からなる。

序論では、問題の所在、先行研究、本論文の目的と方法と構成が説明されている。松岡は、多くの先行研究において作品のモチーフの「朝鮮らしさ」や「韓国らしさ」が論者の主観により決められていることを指摘し、論者が文脈を把握できないモチーフが考察対象から除外されてきたことを批判している。また、先行研究ではしばしば日本統治期の延長線上にあるとみなされてきた植民地解放後の創作活動を、変動する社会情勢や画家の生活状況を踏まえて再検討し、その特徴を正しく把握することの重要性を説いている。

第1章「日本留学と故郷の風景」では、故郷 ^{キジャド}箕佐島（現在の ^{アンジャド}安佐島）での生い立ちから、日本での留学生活、そして帰国後に東京の美術団体を退会するまでの修養期を扱う。この章で松岡は、駆け出しの画家としての生活状況や人間関係を紹介するとともに、日本の展覧会へ出品した作品に描かれた故郷のモチーフを分析している。これにより、当時の金煥基の作品には、日本人が期待する朝鮮的風景にとどまらず、出身地の島の人間にしか持ちえないローカルな感性や、日本統治下における朝鮮人の葛藤が現れていることを示している。

第2章「南北分断と陶磁器絵画の始まり」では、1945年の植民地解放後から朝鮮戦争勃発直前までの目まぐるしい社会変化のなかで、金煥基が従来の油彩画に代わって出版物の挿絵に力点を移行して展開した創作活動の実態を明らかにする。とりわけ、画家が1950年代の代表的モチーフとなる朝鮮時代の白磁の絵画をこの時期に制作し始めたことを重要視し、どのような状況でそうした絵画を描き始めたのか、それらは日本統治期に描かれた壺や甕の作品とどのように違うのかを分析する。

第3章「朝鮮戦争と避難生活下の絵画」では、1950年の朝鮮戦争勃発から1953年の休戦協定までの時代を扱い、釜山に避難した同僚の画家たちが困窮するなかで、金煥基が韓

国画壇の維持に尽力していた様子を描き出す。この時期の作品には避難民の過酷な現実や、離散を免れた家族がともに暮らせる幸福感が反映されていることを示し、さらには、新機軸として現れた仏像のモチーフが統一新羅時代の歴史を賞揚する当時の韓国の文化政策と軌を一にしていたことも明らかにした。

第4章「パリ滞在の期待と落胆」では、1953年の休戦協定以降、1956年から1959年にかけてのパリ滞在までの時期を扱っている。本章が明らかにしているのは、日本留学時代から金煥基が抱いていたパリ美術界への憧れと現実とのギャップ、そしてパリ滞在中の経済的困窮である。「韓国的な」情緒を西欧画壇に広く紹介することを仲間に期待されて送り出された金煥基は、自らの意気込みとパリ美術界からの評価のズレに落胆し、新たな作風を生み出すこともなく、生活に困窮したまま帰国した。

結論として松岡は、これまでの議論によって、1950年代の韓国画壇において金煥基とその作品がいかに必要とされ、画家自身が韓国国内の期待に応えようとしていたかが明らかになったと述べる。パリにおいてその「情緒的」な作風をかたくなに変えなかったのも、韓国国内における自身の作品の意義を重要視していたことを示すものであったと指摘する。

月単位で再構成された画家の詳細な経歴に基づく松岡の作品解釈は説得力がきわめて高く、本論文は金煥基の作家論・作品論として末永く参照されると期待される。それに加えて、あえて現存作品の少ない1950年代という時代に注目しているという点でも、本論文の学術的意義は大きい。朝鮮史研究において1950年代は、植民地期と1960年代以降の軍事独裁政権期の間に挟まれているため、研究が立ち遅れてきた。また、朝鮮戦争とその後の混乱のせいで資料が散逸しているため、研究自体が困難であった。1950年代の実証的研究が増えてきたのはここ15年ほどのことであり、その帰結として、その前後の時代の歴史像も見直されつつあるのが現状である。

そうしたなかで、本論文は、金煥基というひとりの画家の生活と作品を基軸として、1950年代前後の韓国文化史の一側面を丹念な資料の収集と分析によって綿密に、かつ説得力をもって描き出したという点で、研究史上重要な意義を有している。各時代の社会的・文化的背景を踏まえつつ、金煥基の生活状況や人間関係に照らして個々の作品を解釈するという方法は、堅実であるばかりでなく、発見的でもある。たとえば、従来の研究では、焼き物をモチーフとした作品の表面的な類似から、植民地期と解放後の画家の創作活動の連続性が想定されてきたが、松岡は時代的背景や画家の生活状況の違いから、それらの作品が異なる意義を持つことを明らかにした。また、朝鮮戦争期の人民軍によるソウル占領と画家たちの釜山での避難生活を、《避難列車》(1951年)や《バラック》(1951年)といった作品の分析を通して再構成した記述は、先行研究には前例のない具体的かつ詳細なものであり、本論文の数ある貢献のうち白眉といえる。残されたわずかな油彩画だけでなく、雑誌の表紙絵や挿絵なども検討し、画家や文学者などの人的ネットワーク、生計を立てるための文筆活動など、当時の状況が手に取るように分かる記述となっており、高く評価できる。

もっとも、さらなる研鑽の余地もある。本論文は、金煥基の作風に具象表現が残る1950年代までに焦点をあてており、画家が渡米した1960年代から没年までの抽象絵画時代については詳細に論じていない。ニューヨークを拠点とした抽象絵画への作風転換のプロセスを解明することは、今後の重要な課題のひとつである。また、1950年代の韓国画壇の画家たち、あるいは海外で評価を得た他の韓国画家たちとの比較も課題として残る。加えて、

本論文には、特定の画家の生活や経歴の微視的な分析が、個人的経験のレベルを超えた社会的・文化的事象の考察や超域的・通時的テーマの解明に十分活かしきれていないという面があることも否めない。たとえば、帝国主義と美術制作の関係や戦災による文化の喪失の問題がそれに当たる。

しかしながら、これらは本論文の成果を踏まえたうえで今後の長期的な研究課題として発展させるべき点であり、これらにより本論文の持つ重要な学術的価値が損なわれるわけではない。韓国近現代美術を代表するひとりの画家のすぐれた作家論・作品論である本論文は、ひとたび公開されれば、近現代美術史研究や朝鮮文化史研究の発展に大きく貢献すると期待される。以上の理由により、審査委員会は全員一致で、本論文が博士の学位授与に値すると判断した。